

教職大学院 News Letter

協創

にいがた教育フォーラム 2017 in July 特集

第5号

2017.10.1

Since2016

7月22日(土)、新潟大学教育学部において、新潟の教育について考える「にいがた教育フォーラム2017 in July」を開催し、シンポジウムと8つのラウンドテーブルを以下の日程で行い、県内の教員ら120人の参加を得て活発な議論が展開されました。

開会の挨拶



新潟大学学長 高橋 姿

「にいがた教育フォーラム2017 in July」のタイトルを見た時、そこには、年に何度かそして次の年も開催していこうという教職大学院の先生方の熱い気持ちを感じました。皆様も熱い気持ちをもって、参加しているのだろうと思います。ありがとうございます。

大学の社会貢献とは、従前は、優秀できちんとした学生を社会に送り出すことでした。それは、今も変わりません。そのことに加えて、現在は、大学の力をダイレクトに社会に向けて直接還元すること、そして社会の様々なニーズや叡智を学内に持ち込むことが求められています。大学での学びが大学内にとどまらず、シームレスとは言わないまでも、社会と密接につながった状態で貢献することが重要です。

大学教育に携わる一人一人が、大学での学びを社会に開かれたものにしていくこと、社会のニーズに応え貢献できる人材を育成しようという気持ちを強く持つことが、教職大学院のみならず、本学の教員養成課程全体のパワーアップにつながると考えています。

本日は、協力校の先生方やご参加の皆様の意見を伺いながら、社会に開かれた教育課程などの今日的な課題を一緒に考えていく場となることを強く祈念いたします。



にいがた教育フォーラム2017 in July

全体会・シンポジウム 13:20~15:00

13:20	開会の挨拶
13:30	シンポジウム 全体進行 宮 蘭 衛 (教職大学院) コーディネーター 雲尾 周 (教職大学院) 話題提供 兵藤清一 (教職大学院) シンポジスト 小見まいこ (NPO 法人みらいず works 代表理事) 山岸 則子 (地域教育コーディネーター) 田邊 裕一 (新潟市立亀田小学校長)
15:00	全体会終了

ラウンドテーブル 15:20~16:50

分科会	ラウンドテーブルのテーマ
第1会場 教育課程編成	「これからの教育課程」の在り方
第2会場 授業づくり	教科の本質に迫る学習課題の探究
第3会場 教育相談	いじめ・不登校のサイン見逃しが繰り返される背景
第4会場 特別支援	学習参加が難しい子どもへの支援
第5会場 学年・学級経営	教師と子ども、子どもと子どもの関係づくり
第6会場 学校経営	教師の協働性を高めるチーム学校の体制づくり
第7会場 グローバル教育	グローバル化の進展に対応した教育活動
第8会場 特設 地域	家庭・地域と子どもの育ち
16:50	分科会終了


専攻長挨拶
**教育実践開発専攻長
小久保 美子**

実は、今年のこの会は、「中間報告会」という名称でした。それを「教育フォーラム」としたのは、教職大学院の設置理念に基づいています。すなわち、教職大学院での学びを学校現場の先生方をはじめ、関係の皆様に関き、新潟県、新潟市の明日からの教育に貢献する機会と場にしたいという願いによります。

私たちは、様々なしがらみの中で、本当の気持ちをなかなか言うことができないのではないのでしょうか。このフォーラムの場では、年齢・役割・立場を越えて本当の思いや悩み、考えを語り合っただけであればと思います。

先般、日野原重明先生がお亡くなりになりました。私は先生から生き方を学ぶ者の一人でしたが、印象に残っている言葉の一つに「時間の使い方は命の使い方である」というものがあります。本日、いろいろな時間の使い方がある中で、当フォーラムを選び、貴重な時間を私たちと共に過ごすためにご参集くださいましたことに、心より敬意を表し、感謝申し上げます。いらしていただいたすべての皆様にとって、これからの時間が本音を語り合える実りあるものとなりますよう、私たちスタッフ一同精一杯努めて参ります。本日は、どうぞよろしくお願ひいたします。



上：シンポジウム会場
下：ラウンドテーブル会場



シンポジウム

「社会に開かれた教育課程の実現に向けて」


話題提供
**新潟大学教職大学院
兵藤 清一**

話題提供の視点1：なぜ「社会に開かれた教育課程」が求められているのか

今回の学習指導要領の改訂に関わる中央教育審議会答申（平成28年12月21日）は、2030年以降の社会を見据えて、学校教育が果たすべき役割を示そうとしています。

その中で、我が国は、急速な技術革新による職業環境の劇的変化、超少子高齢化による人口減少社会、グローバル化の進展による国際的な存在感の低下等、急激な社会の変化への対応が喫緊の課題となっています。

このような状況を踏まえ、学校は、社会の変化に目を向け、その変化を柔軟に受け止め教育課程を介して社会（地域）とつながり、子どもたちに未来（持続可能な社会）を創り出す力（資質・能力）を育成することが求められています。そのために、「社会に開かれた教育課程」が、目指すべき理念として位置付けられました。

話題提供の視点2：どのように「社会に開かれた教育課程」を実現していくのか

上記の答申では、実現に向けた体系的な取組の視点として以下の3つが示されました。

- 社会（地域）との目標の共有化の視点
- 求められる（育成を目指す）資質・能力の明確化とその育成の視点
- 地域の人的・物的資源の活用及び社会教育との連携の視点

学校では、これらの視点から、その実態に応じて様々な取組を工夫していくことが大切です。その際、コミュニティ・スクール、地域学校協働本部、チーム学校、教員の資質向上等のキーワードが示された「学校と地域の一体改革」に関する3答申（平成27年12月21日）やそれらの内容の具体化を強力に推進するための「次世代の学校・地域」創生プラン【馳プラン】等を踏まえて、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた方策を考えていくことが重要になってきます。

シンポジストの主張

熟議をしながら、 自分ごとになる教育課程をつくる

**NPO 法人みらいず works 代表理事
小見 まいこ**



みらいず works は「未来にふみ出す学びを 子どもたちへ」をテーマに①自分軸と社会軸が育つキャリア教育の推進、②社会に開かれた教育課程・学校づくりの支援、③地域で子どもの学びを支えるネットワークの構築という3つの事業方針を掲げ、活動しています。

学校支援の中で、「社会に開かれた教育課程をつくるのに正解はない」と実感しています。その学校の子どもたちや地域の課題に応じて、教育課程は違うからです。

重要な視点は「自分ごと化」だと考えています。関わる一人一人が未来を見通した上で子どもたちを取り巻く課題を自分のこととして捉え、目の前の子どもたちに必要な学びをカリキュラムとしてつくるということです。

そのためには、熟議を積み重ね、①目的と目標を丁寧に共有すること、②地域や子どもの課題を正確に捉えて分かち合うこと、③ふりかえり学び続けること、が不可欠です。

オンリーワンの教育課程づくりは、子どもたちの成長だけでなく、地域の活性化にもつながる大仕事です。ぜひいろいろな方を巻き込みながら「みんなで」つくるプロセスを大切にしていきたいです。

地域と学校のこれからの連携・協働



**地域教育コーディネーター
山岸 則子**

地域教育コーディネーターの立場から、学校の教育活動において地域資源を活用した取組の具体的事例と効果を紹介しました。小学校では、体験型安全教室に不審者役として参加した地域住民や保護者の危機意識が高まり、子どもたちを守る環境整備への深い学びにつながっています。また、中学校では学力向上という

学校の課題解決に向け、地域の人的資源を活用した「うちの塾」やそこから派生した地域の「学習サポート塾」へと活動が広がっています。

今回のテーマであった社会に開かれた教育課程については、自分自身がシンポジストとして参加することにより、理解が更に深まりました。この教育課程を推進するには、学校はもちろんのこと、地域や保護者の理解がどこまで深められるかが鍵になると感じます。これからますます多様化していく社会を生き抜く力、地域を愛する心を持った子どもたちを育てるためには、学校と地域とがチームとなり、それぞれが持つ課題や思いを共有していく必要があります。そのために、これからも学校の思い、地域の思いをつなげる役割を担っていきたいと思います。

社会に開かれた教育課程を目指して



**新潟市立亀田小学校長
田邊 裕一**

これからは「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し地域と社会、学校とで未来を見据えた取組を進めなければなりません。しかし、学校の目指す方向性と地域の目指す方向性のベクトルを合わせるためには工夫が必要です。亀田小学校では、校区中心部の人口減による商店街等の衰退が懸念され、学校として何とか活性化を目指せないかと考えました。学校が目指す子どもの将来像を、「地域の伝統や文化をしっかりと学び、亀田の良さを存分に知る。そして、亀田の人々の生き方に共感し亀田の町を愛する子ども」としました。

これを地域と共有するため「亀田の子どもを語る会」を開催し、地域や保護者の方々と共に方向性を共有しました。さらに、この組織を「亀っ子応援隊」に改編し、総合的な学習や生活科における地域の学びの充実に資するため、授業計画作成段階から助言をいただけるようにしました。

これからも、学校は地域の一員であることを一層意識し、学校経営に当たらなければならないと考えています。

**ラウンドテーブル 第2会場 授業づくり
 「教科の本質に迫る学習課題の探究」**

(教育実践コース現職院生 齋藤 誠也)



私たちのグループは、教職経験年数や専門教科の違うメンバーが集まり、日々の授業における悩みを、それぞれの話に耳を傾け共感し合いながら、主に「質の高い学習課題」と「かかわり」について語り合いました。

まず初めに私が、教職大学院での学びを基に構想・実践・検証している授業について次のような話をしました。

教職大学院で学習科学の理論を学び、子どもたちの学びを広げ深める協働的な学習活動の在り方を探っています。子どもから「問い」を引き出し、子どもの「他者との建設的な相互作用」を生み出すことを目指しているのですが、子どもたちの他者との建設的な相互作用、つまり、子どもたちの協働的な姿を引き出すことに苦労しています。

「質の高い学習課題を設定するためには、やはり子どもたちの問いが大切」「問いの共有が難しい」「〇〇したいという子どもたちの必要感や思いが引き出せない」「教師が学習課題を与えてしまっている」「対話活動ありきになっている」「かかわりが目的化している」といった声が参加者からありました。そして、様々な視点からの意見交流を通して子どもたちの自律的な学びがゴールであり、主体があって対話が生まれ、深い学びが生まれるのではないかという考えに至りました。

子どもたち自身で問題の奥底にある「問い」を見つけ出し、学習課題を設定し、他者とのかかわり合いを通して学びを広げ深めていく。私たち教職大学院生が大学院で行っていることがまさにこの学び方です。予測困難なこれからの時代を生き抜く子どもたちにとって必要であり、身に付けていくべき学び方なのではないかと思います。

参加者との話し合いと教職大学院での学びが結び付き、私の目指す授業像をより鮮明にすることができました。チャレンジングな授業実践に対するモチベーションを高めることのできた大変有意義な時間となりました。

**ラウンドテーブル 第5会場 学校経営
 「教師の協働性を高める**
チーム学校の体制づくり」

(学校経営コース現職院生 金田 良哉)

私から、勤務校における「情報発信」の取組が、同僚教師や地域教育コーディネーターとの協働性を高め、様々な可能性が話し合われ、チーム学校の体制づくりに向けて一歩前進しているという話題提供をしました。

その後、参加者それぞれがお持ちの「情報発信」の実践事例から、校内外での様々な関係者とのかかわりや協働性、チーム学校について話し合っていました。

ホームページについては「他県からの転校生が見て、安心して転入してきた」という事例から、誰でも見ることができるメリットに気づきます。PTA広報と連携したコンテンツを公開している学校は、ホームページを保護者や地域とのコミュニケーションツールとして頻繁に更新しているというお話でした。

「持続可能な情報発信のシステム化」が課題であり、実現できている学校では、学校の特徴の一つとなっていると分かりました。

「情報発信」ということに関して、商店街の放送に、子どもの番組を活用している学校がありました。商店街に人を呼ぶ効果はもちろん、校内放送でも活用していました。子どものモチベーションが高まり、地域が子どもの活動を知る、学校と地域とがまさにWIN WINとなる取組でした。この取組の過程では、同僚教師だけでなく、地域との協働の姿や地域も含めたチーム学校の姿がありました。

「情報発信」を媒介にして、人とのかかわりが生まれます。「情報共有」によって新たな試みが検討され、実現に向かいます。

今回のラウンドテーブルにより、勤務校での実践の価値づけができました。また、今後の取組に、夢が広がると思いました。大変ありがとうございました。



右：ラウンドテーブル

シリーズ「授業」No.3

本学教職大学院の授業について紹介します。

共通必修科目

第4領域「学級経営の理論と実践」

(場所 特定連携協力校 亀田小学校)

担当：雲尾周 高橋雄一 吉澤克彦 古田島恵津子

受講者は最初、学級会活動やホームルーム実践等、一つ一つの事例紹介等がたくさんあるものと期待しています。確かに好事例の紹介も多少ありますが、そうは展開しません。1日目(各日3コマ)は全体のガイダンス的な内容であり、受講者は教室の中で考えていた学級経営が、学校の目指す子ども像と密接につながっていることを感得します。2日目は小学校、3日目は中学校をベースに展開し、4日目は特別支援の視点を加味します。5日目のまとめで、学級経営から学年経営・異年齢交流、さらには地域交流も視野に入れることができるようになっていきます。

(雲尾 周)

・・・院生の声・・・

「生きる力」を育むうえで、学級活動を充実させることがいかに重要かを学ぶことができました。

また、子どもたちが集団の中で学ぶことの意義を再確認することができました。私は、学級経営とは自分自身の信念や教育観そのものであると、この講義を通して考えました。私が「大切にしたいことは何なのか?」「育てたい力とはどんな力なのか?」を再度自分に問い直すきっかけとなりました。

(教育実践コース
現職院生 大矢 有紀子)



下：特定連携協力校 亀田小学校での授業



第6領域「通常学級における特別支援教育の実際Ⅰ」

(場所 大学)

担当：長澤正樹 古田島恵津子

これからのインクルーシブ教育システム構築のためには、子どもたちの多様性への対応と教育的対応の柔軟性が求められると思います。そのために、通常の学級における教育方法としてユニバーサルデザインの考え方を導入することが必要と考えます。どの子にもわかりやすく参加できる学びを追求した授業づくりです。さらに、読み書き障害をはじめとする発達障害の特性理解と、特性に応じた指導も大切です。そして、多様性に柔軟に対応するための校内支援体制の構築も求められます。この授業では、このような必要要件に対応できるための内容を準備し、講義形式だけではなく話し合いによる授業案作成と実践、省察などをふんだんに取り入れ、将来インクルーシブ教育システム推進役の一人として活躍できる教員の育成をめざしております。通級指導教室など、通常の場合以外の教育について



では、ゲストティーチャーにも担当していただきました。

(長澤 正樹)

上：大学講義室での授業

・・・院生の声・・・

講義で、発達障害の子どもは、どのように見えているのか、感じているのかを体験的に学び、子どもが何に困っているのかをよく観察し、その子の気持ちに寄り添うことが大切だと気づかされました。

また、通常学級にいる「気になる子」への対応を話し合うことを通して、様々な対応を学びました。その子の良いところを褒めることやあたたかい学級づくりなど、どの子にも自分の居場所が感じられるような支援が大切であることを学びました。

(教育実践コース
学部新卒院生 小林 亜美)



選択科目

「授業における学習研究」

(場所 大学)

担当：一柳智紀 兵藤清一

この授業では、知識基盤社会に対応して求められる授業の在り方について、「協働」

「探究」をキーワードに考え、授業で生起する事実に基づいて授業を省察し、授業の課題を見だし、改善していく力を身につけることを目指しています。

具体的には、近年の教育政策の中で重視されている授業の在り方や、それにかかわる研究知見などの理論的背景を学びつつ、授業ビデオや記録を参照したり、実際の授業を観察し、その記録を作成したりして、子どもの学習の様子を丁寧に検討しています。そのような検討を通して、授業における具体的な子どもの姿に基づきながら、「協働」「探究」とはどのような姿なのか、なぜそれらが大切なのか、それらを授業において実現するためにはなにが必要なのかを、まさに院生同士による「協働」「探究」を通して考えることをこの授業では大切にしています。

(一柳 智紀)

・・・院生の声・・・

「授業における学習研究」では、「探究」と「協働」をテーマに様々な授業実践の分析を通して、院生一人一人が、「探究」と「協働」に対する捉え直しを図り、互いの解釈を交流させながら理解を深めてきました。

また、6月と7月に院生が実践した算数科と社会科の授業を詳細に文字におこし、授業中の教師や児童の発言や活動を丁寧に分析しながら、「探究」と「協働」の具体的な姿を見いだす活動にも取り組み、学びを深めました。

(教育実践コース

現職院生 小池 誠一)



【編集後記】

協創第5号は、フォーラムの特集とシリーズ授業とで紙面を構成しました。

学長や専攻長の挨拶にもありますように、教職大学院の学びや取組が、新潟の教育に貢献できるよう、着実に歩んでいきたいと決意を新たにしております。今後ともよろしくお願いたします。(吉澤 克彦)

「キャリア教育の理論と実践」

(場所 大学)

担当：松井賢二 吉澤克彦

この授業は、松井賢二教授とともに担当し理論と実践との往還を授業の中で実現すべく構想しました。

理論面については、具体的には、松井教授のキャリア教育に関する基本理念や基礎理論、歴史的背景、文献などについての講義と職業レディネステスト(VRT)の演習。

私は、学習指導要領への位置づけや最新情報、キャリアカウンセリングなどについての講義や演習を段階的に行いました。

そのことと並行して、4名のゲストティーチャーによるキャリア教育実践や院生の実践発表を組み込みました。

授業の締めくくりでは、自分自身がどのような考えでキャリア教育を実践していくのかを議論してまとめています。

(吉澤 克彦)

・・・院生の声・・・

大学の先生方から、基本的な理論や指導の手立てを学ぶとともに、外部指導者の先生方からの特色ある実践発表から、多くの気づきを得ることができました。

これらの学びから激変する社会の中で自分らしく生きていく子どもを育てていくために、小中高と一貫したキャリア教育を行っていくことや、子どもの発達段階に応じたキャリア発達を促す教育活動の在り方を構造化し、実践していくことの重要性を強く感じました。

(学校経営コース

現職院生 高橋 健)



「にいがた教育フォーラム2018 in March」予告

開催日時：平成30年3月3日(土)

講演：「学び続ける教師」加治佐哲也 様

(独立行政法人国立高等専門学校機構 監事)

ポスターセッション・ラウンドテーブル



新潟大学教職大学院 News Letter 「協創」 第5号 2017.10.1 発行

編集・発行・印刷

新潟大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻(教職大学院) 広報部会

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町 8050

問い合わせ先: kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp

ホームページ URL: <http://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/>

ニュースレター、各種案内等はHPに随時掲載しています。